

40歳後半の重度運動性失語症及び重度片麻痺を呈した利用者が 環境変化により意欲的になった事例

○永井 泉 (SW) 岡村 美紀 (SW)
(新潟県障害者リハビリテーションセンター)

1. はじめに

40歳後半の重度運動性失語症と重度片麻痺を呈し、高齢者施設から新潟県障害者リハビリテーションセンター（以下、当センター）に入所してきた利用者が、環境が変化する事で意欲的になったケースを経験した。以下に、この貴重な経験をまとめたので報告する。

2. 事例概要

(1) プロフィール

A氏：40歳代後半、男性

[診断]：脳出血

[障害名]：右片麻痺、重度運動性失語症
身体障害者手帳 1種 1級取得

[ADL]：着替え・排泄・食事・移乗・移動（屋内）は自立、歩行・階段昇降は見守り、入浴・掃除・洗濯は一部介助から全介助。車椅子を使用し生活している。

[IADL]：金銭管理・公共交通機関・電話の利用は一部から全介助。

[性格]：

- ・あまり自分から話しかけるタイプではない。
- ・周りの様子を見守っている。
- ・周りに気を使う。
- ・干渉される事が好きではない。
- ・納得してから取り組む。

[言語機能]：

- ・特に「いいよ」という言葉の保続が多い。
- ・複雑でなければ理解はできるが、表出が困難。
- ・単語は8割程度理解でき、漢字の書きは比較的行えている。

[身体機能]：

- ・上下肢とも重度の運動麻痺。中程度の感覚障害。
- ・歩行はプラスチック短下肢装具を装着し四点杖で見守りレベル。20m程度の連続歩行可能。

[利用形態など]：生活介護で、週2回の通所で利用している。他施設の利用はなし。月1回受診、週2回訪問マッサージを受けている。

(2) 家族形態

・妻（40歳代後半）キーパーソン
A氏の日常的な支援を行い、シフト制のパート勤務。

・長男（20歳代前半）
学費の調達の為のアルバイトと学業の両立で日々多忙。

・長女（10歳代後半）

家事の支援を行い、協力的。

A氏の両親との2世帯家族であるが、両親共に高齢で直接的な支援は難しい。特にA氏の父は心筋梗塞を患い、今後介護サービス利用を見込んでおり、A氏の介護と併せてさらに負担が重くなると予想される。

(3) 生活歴

20代の頃バイクで転倒し右上肢負傷した事をきっかけに左利きになる。33歳まで飲食店に勤務し、その後レストラン、飲食店のオーナーを経て、運送会社でアルバイトとして勤めていた。

(4) 現病歴

平成25年10月10日、運送会社の荷物の仕分けを行う仕事に、嘔吐・意識障害・右片麻痺あり、病院に救急搬送される。CT上、巨大な右被殻出血あり、緊急手術施行。11月19日リハビリ目的で医療センターに転院。平成26年5月27日自宅退院される。退院後は高齢者施設（小規模多機能型居宅介護）を週4回利用される。

(5) 高齢者施設の様子

居室で過ごされる事が多く、何かしようとする迷惑をかけてしまうと、周りに気を使われていた様子であった。その様子を見かねた職員の方が声を掛け、気にかけてくれていた。また、お誕生日会等の行事の際、食事や映画へ職員と一緒に掛け、個別対応をしてくれていた。

言語的コミュニケーションが難しい為、環境に慣れるまで時間がかかったが、だんだんと慣れていき、目を離してもできる事が増えていった。その様子を受け、ケアマネジャーから他施設の利用を考え、社会参加を目的にステップアップしてはどうかとの提案があり、当センターへ通所体験利用（平成27年1月19日～21日の3日間）につながる。

(6) 当センター体験時の様子

不安が大きく拒否反応を示していたが、日に日に慣れ、時間割を確認しながら日課に沿って移動する事が出来ていた。新しい環境に対して抵抗や失語症の為か他者とのコミュニケーションは見られなかった。体験を通じて、妻よりA氏も納得して利用を決定したとの事であったが、当センタ

一の印象として、A氏よりもご家族の意向が強く、説得されている様子だった。

(7) 利用目的

言語訓練、社会参加、身体機能の向上

(8) 目標

出来る事を増やしたい、社会復帰、杖で歩けるようになりたい、話せるようになりたい

3. 支援の状況

(1) 訓練内容

一般教養：語想起・失語症ドリル・発声練習

パソコン：高次脳機能バランス

手工芸：エコクラフトで小物作り

PT：関節可動域訓練・歩行練習など

ST：復唱・呼称訓練など

(2) 利用経過

利用開始時、他利用者に関わる事がなく、挨拶も見られなかった。特に、パソコンに対しての抵抗が強く、退室が見られていたが、利用されてから半年くらいから、意欲的な様子が感じられるようになった。

ア. 意欲的と感じる状況・根拠

- ・自主的に挨拶が見られるようになった。
- ・ジェスチャーを交えながら話そうとしたり、伝えようとしたりの行動が見られ、伝わらなかった際は単語や記号を書いたりする。また、伝えたい事を事前に写真を用意しスマホで見せに来られ、ご家族についてお話しされる。
- ・訓練に対し拒否反応や退室するといった行動が見られなくなった。
- ・声掛け(促し)に拒否が見られず素直に応じる。
- ・表情が明るくなり笑顔が増えた。
- ・発話しようとする姿勢が見られるようになった。

イ. 現状

- ・PT・OT・STでの大きな変化はなく、大きな改善は見られなかった。
- ・体重が増加傾向にある為、自主トレーニング時エアロバイクで体重減少を目指す
- ・スマホ操作は分からなくても自分からいじってみたりご家族に聞いたりして操作方法を覚えている様子。

4. 支援の結果

(1) 意欲的・前向きになった要因・工夫していた点

・同世代の方と一緒に訓練ができる環境や交流を図る事ができる環境を整えた。

一般教養・パソコン・手工芸それぞれの訓練室では、機能訓練の利用者も一緒に訓練を行ってお

り、コミュニケーションを図る事ができた。

・お互いが障害の状況を理解し生活をしている為、お互いが助け合える環境にあった。

・訓練以外では食堂や談話室、館内ロビー等、交流できるスペースがあり、年代を問わず交流を図る機会がある。

・周りから声を掛けられる事で自然と打ち解けられる環境にあった。

・挨拶や声掛けを行い、人に対する抵抗が徐々に減っていくように支援をした。

・他利用者とコミュニケーションを図れるよう職員が声を掛け、人と触れ合う機会が増えた。

・気にかけてすぎると、自分にかまってくれないと訴える為、様子を見ながら適度に声掛けを行った。

(2) 生活支援員(社会福祉士)として

ご家族との連絡ノートを通じて、連絡や日頃の生活や訓練の取り組みの様子等、ご家族と情報を伝えたり希望を聞いたり情報交換を行っている。訓練担当以外でも発声練習を行い、発音状況を定期的に把握している。

(3) 今後に対する希望

[妻]

・今よりもできる事が増えて、生きていく目標が持てるようになってほしい。

・当センターの他利用者の様子を見て、杖で歩いてほしい・杖なしでも歩けたらいいが、A氏の意欲次第に合わせ、取り組んでもらいたい。

[A氏]

・目標に向かって頑張れるかとの問いに、「はい」と即返答され、利用開始時と比べ様々な事に挑戦したいといった反応が見られ、妻も驚かれていた様子であった。

(4) 今後について

・見守りレベルでT字杖歩行を検討する。

・自主トレーニングメニューを考えていく。

・スマートフォン操作を広げる。

・ジェスチャー等の非言語的なコミュニケーションと簡単な発話等の言語的コミュニケーションを向上させる。

5. まとめ

利用開始時の状況と比べ、現在意欲的な様子が伺えている。PT・OT・STでの評価結果に大きな変化はみられないが、話そうとしたり、課題に取り組もうとしたりと自主的な言動が少しずつ増えている。このような言動の変化に環境的要素が大きく関与していたと考える。今後も環境的要素に配慮しながら、目標に少しでも近づけるように支援をしていきたい。